◆教化研究Ⅱ◆

教化と報恩

――教化論についての覚書――

石川康明

はじめに

この小稿は、「教化とはなにか」について、思いつくままに書きつらねたものである。説法（教）、布教・伝道・化導・教化などの言葉が、ほぼ同じ意味として使われている現状を見るにつけ、はたしてそうなのかという素朴な疑問を抱いたこともあり、また「教化研究会議」をより一層前進させ、深めていくうえでも、「教化」の二文字にこめられた意味を問い直すことが重要ではあるまいか、と考えたこともこの一文を書きつづる理由であった。

同時に、「本化の教団」「本化の弟子」といわれることの意義を考えなおし、「私」の計量した「教化」ではなく「我もいたし人をも教化候へ」と教示する日蓮聖人の教化に導かれて、はじめて教化をわれわれがなしえるという根本的立場を築いていくためには、まず法華経と日蓮聖人に「教化とはなにか」を聞くことが不可欠ではないか、というのがこの小文を記す最大の動機である。そこで、「教化論」の検討と教化をめざす教団形成という課題にアプローチするために、「教化」の文字に目をそそぎながら、教化の意味と実践のありようをたずねていきたい。「教化」と教化活動の信仰的意味を問いなおすきっかけとなれば、この教化論の覚書という一文の目的は達せられた、とも考えているが、以下きわめて素朴な考察を試みていきたい。

一、説法と教化

1

説法とは、文字通り仏の教えを説き、種々な方法を用いて人々に仏教の内容を伝えていく、という意味である。説

法は、説教＝説経と同義であるが、法説・譬説・因縁説をもって講説していく談義勧化の活動のことである。布教・伝道・弘通などの言葉もまた、説法と同様の営為を指すものとして、こんにち一般的に用いられている。

法華経には、教主釈尊の説法・演説を通じて釈尊出世の本懐があかされている。釈尊は「一代聖教乃至八万法蔵の説者」（善無畏三蔵抄）として、過去・現在・未来に永続する「三世説法の儀式」を開示している。

釈尊は、方便品において信力堅固なる者に向って法華経の仏語をあかし、「諸の仏の宜しきに随う説法の意趣は、解ること難し」と示す。過去の仏、未来の仏、現在の仏が「無量無数の方便と種種の因縁と譬喩と言辞とをもって、衆生のために、諸法を演説したもう」のである。「諸の衆生に、種種の欲と深く心に著する所とあることを知りて、その本性に随って、種種の因縁と言辞と方便力とをもっての故に、しかも、ために法を説くなり」とも語られている。説法は、このような内容と方法を駆使した多様性をもつ随宜方便を特質としている。しかし、この「法を説く」という行為は、説法の意趣を教示するだけにとどまるものではない。方便を用いた説法は、すべて「一仏乗のため」であり、衆生に「一仏乗の一切種智を得せしめんがため」である。「今は正しくこれその時なり、決定して大乗を説かん」という決断にもとずく釈尊の説法は、法華一仏乗に帰入させ、仏慧に入らしめ、仏の知見に開示悟入させる目的のためになされたものであった。「諸の仏・如来は、但、菩薩のみを教化したもう。諸有の所作は、常に一事のためなり。唯仏の知見をもって、衆生に示し悟らしめんためなり」。多種多様な随宜方便の説法は、無智と邪見に錯乱し、三悪道におち、苦毒を受け、正法に迷惑する衆生を、いかに仏道に入らしめるか、という仏の慈悲と智慧のあらわれとして示されている。それは、教化して仏道に帰入させるただ一つの目的のためになされたのである。

苦悩する衆生に法を説く仏の所作は、法華一乗の仏道に帰依せしめて、仏と等しくさせる久遠の誓願を具現するというものでもあった。「若し法を聞くことあらん者は、一として成仏せずということなからん」という仏の本願が、他ならぬ苦の衆生にあまねく注がれていることがここに語られていく。説法という所作そのものが自己目的ではなく、衆生を「教化」「済度」していく誓願を実現していく「行ぜし所の仏道」であったことが教示される。説法という因行は、〈教化から成仏へ〉という果徳に直結する。法華経への大信力すなわち「諸の疑惑な人の心に大歓喜を生」ずる不退の信の世界において成仏は約束される、と釈尊は語るのである（方便品）。

寿量品の教主釈尊もまた、久遠の昔から疲倦なく実践しつづける説法の所作を述べる。「諸の衆生には、種種の性

・種種の欲・種種の行・種種の憶想・分別あるをもっての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁・譬喩・言辞をもって、種種に法を説きて、作すべき所の仏事を未だ曾て暫らくも廃せざるなり」。仏事とは、一切衆生を教化し救護するということである。仏の種種な説法が、衆生を教化して仏道に入らしめるためであり、度脱することをめざすものであることが、ここでも示されている。善根をうえない薄徳の者であり、おごり高ぶって仏を見ようともせぬ「顚倒」の我ら衆生に向って、「度すべき所にしたがって」種種の法を説き、「速かに仏身を成就することを得せしめん」と救済の実現に励む教主釈尊の説法から教化に至る救魂の精神を結晶させている。いわゆる「六或示現」もまた、衆生を救うために種種に姿を変えて、この世に身を現わす教主釈尊による慈悲の化現である。それは何よりもこの娑婆世界を化境とする教化の仏事としてなされる。仏国土を浄め、一切衆生を救済する仏の本願を示現した説法を通して法華経の永遠性・真実性・救済性に衆生を化導していく姿が提示されているわけである。

したがって、法華経における説法とは法華経に参入させ衆生を教化していくための多様な教化・化導の方法・手段＝「化儀」である。法華経の永遠性・救済性を教主釈尊が語った肉声であり、仏説・仏語の内容を現わすものであった、ということができる。

2

法華経に記された「教化」の二文字を管見の範囲で選び出すと、別掲の通りである。二十八品のうち、十七品にわたって四十八箇所に「教化」の文字を拝することができる。

第一表

法華経各品の教化記述回数

	計	長行	偈
序品	1	1	
方便品	5	3	2
譬喩品	5	3	2
信解品	4	2	2
化城喩品	2	2	
五百弟子受記品	6	5	1
受学無学人記品	3	2	1
法師品	1	1	
提婆達多品	1	1	
勧持品	1	1	
安楽行品	1	1	

従地涌出品	9	4	5
如来寿量品	4	3	1
法師功徳品	1		1
常不軽菩薩品	2	1	1
如来神力品	1		1
薬王菩薩品	1	1	
計	48	31	17

第二表

法華経における「教化」の文字内容

1　仏の滅度の後に、妙光菩薩は妙法蓮華経を持ち、八十小劫を満たして人のために演説す。日月灯明仏の八子は、皆妙光を師とし、妙光は教化してそれをして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。（序品、上49～50）

2　無上の両足尊よ、願わくは第一の法を説きたまえ。われは、為、仏の長子なり。唯、分別として説くことを垂れたまえ。この会の無量の衆は、能くこの法を敬信せん。仏は已に曾て世世に、かくの如き等を教化したまえるをもって、皆一心に合掌して、仏の語を聴受せんと欲す。（方便品84）

3　諸の仏、如来は、但、菩薩のみを教化したもう。（同90）

4　舎利弗よ、この諸の仏は、但、菩薩のみを教化したもう。仏の知見をもって、衆生に示さんと欲するが故にと、仏の知見をもって、衆生を悟らしめんと欲するが故にと、衆生をして仏の知見の道に入らしめんと欲するが故にとなり。（同・96）

5　舎利弗よ、若しわが弟子のうち、自ら阿羅漢、辟支仏なりと謂う者にして、諸の仏・如来は、但、菩薩のみを教化したもう事を、聞かず、知らずんば、これ仏の弟子にも非ず、阿羅漢にも非ず、辟支仏にも非ざるなり。（同・98）

6　但、一乗の道のみをもって諸の菩薩を教化して、声聞の弟子は無し（同・130）

7　われは、定んで当に仏と作りて、天・人のために敬われ無上の法論を転じて、諸の菩薩を教化すべし（譬喩品・144）

8　その時、仏は舎利弗に告げたもう「われ、今、天・人沙門・婆羅門等の大衆の中において説かん。われ、昔、曾て二万億の仏の所において、無上道のための故に、常に汝を教化せり。汝は亦、長夜に、われに随って受学せり。われは、方便をもって、汝を引導せしが故に、わが法の中に生れたり。（同・144）

9　華光如来も亦、三乗をもって衆生を教化せん（同・146）

10　三界の朽ち故りたる火宅に生ずるは、衆生の生・老・病・死・憂・悲・苦・悩・愚癡・暗蔽・三毒の火を度

し、教化して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんがためなり（同、170）

11　衆聖の王の、説法し教化したもうを見たてまつらず（同、214）

12　今、われ等は年、已に朽ち邁いて、仏の教化したもう菩薩の阿耨多羅三藐三菩提においても、一念の好楽の心を生ぜざるに（信解品、224）

13　若しわれ等にして、大を楽うの心有りしならば、仏は則ちわがために、大乗の法を説きたまいければなり。今この経の中においては、唯、一乗のみを説きたもう。しかして昔は、菩薩の前においては、声聞の小法を楽う者を毀訾したまえども、しかも、仏は、実には大乗をもって教化したまいしなり。この故に、われ等は、本、心に悕い求むる所有ること無かりしも、今、法王の大宝が自然にして至り、仏子の応に得べき所の如きものは、皆已に、これを得たり、と説くなり。（信解品・242）

14　仏の教化したもう所は、道を得ること虚しからざるとき、則ち已に、仏の恩を報ずることを得たりとなすなり（同、256）

15　世尊は、大恩にましませば、希有の事をもって、憐愍し教化して、われ等を利益したもう（同、260）

16　第十六は、われ釈迦牟尼仏にして、娑婆国土において阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。諸の比丘よ、われ等、沙弥たりしとき、各々、無量百千万億の恒河の沙に等しき衆生を教化せり。われに従って法を聞けるは、阿耨多羅三藐三菩提の為なりしなり。（化城諭品、68）

17　この諸の衆生にして、今に声聞地に住すること有る者は、われ、常に阿耨多羅三藐三菩提に教化せしかば、この諸の人等は、応にこの法をもって、漸く仏道に入るべし。（同、68～69）

18　仏土を浄めんがための故に、常に仏事を作して、衆生を教化せるなり。（受記品中、96）

19　無量無辺の諸仏の法を護持し、助宣し、無量の衆生を教化し、饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を立めん（同、中96）

20　仏土を浄めんがための故に、常に勤めて精進し、衆生を教化せん（同、96）

21　能く衆生の類を教化せん（同、100）

22　仏も亦かくの如し、菩薩たりし時、われ等を教化して一切智の心を発さしめ、（同、116）

23　世尊は長夜において、常に愍みて教化せられ、無上の願を種えしめられしに（同、120）

24　菩薩等を教化して、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめん（人記品、124）

25　諸の菩薩を教化すること、その数は恒沙の如くならん（同、126）

26 諸の菩薩衆を教化し成就せしめん（同、130）

27 今、仏は菩薩を教化し成就せしめんとして、ために開示したもうなり（法師品、156）

28 海において、教化すること、その事はかくの如し（提婆品、216）

29 教化すべきこと難しと雖も、我等当に大忍力を起して此の経を読誦し、持説し、書写し、種々に供養して、身命を惜まざるべし（勧持品、226）

30 為（こ）れ大法王なれば、法をもって一切衆生を教化するなり（安楽行品、272）

31 その時、四大菩薩は、偈を説きて言わく、世尊は安楽にして少病・少悩にましますや。衆生を教化したもうに疲倦なきことを得たまえるや。（涌出品、292）

32 誰が、其のために法を説き、教化して成就せるや（同302）

33 この諸の大菩薩・摩訶薩の無量・無数の阿僧祇にして地より涌出せるは、汝等が昔より未だ見ざりし所の者なり。われは、この娑婆世界において、阿耨多羅三藐三菩提を得おわりて、この諸の菩薩を教化し、示導し、その心を調伏して、道の意を発さしめたり。（同、308）

34 無上の法論を転じ、爾して乃ち、これを教化し初めて道の心を発さしめたり。（同、312）

35 われは久遠より来、これ等の衆を教化せしなり（同、312）

36 云何にして、世尊は少時の間において、かくの如き無量・無辺の阿僧祇の諸の大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまえるや（同、312）

37 「世尊よ、云何にしてこの少の時において、大いに仏事を作したまえるや。仏の勢力をもってなりや、仏の功徳をもってりや、かくの如き無量の大菩薩衆を教化して当に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめたもうは。」（同、314）

38 世尊は、方に仏道を得たまいし時、初めて発心せしめ、教化し、示導して阿耨多羅三藐三菩提に向わしめたりと云もう（同、316）

39 教化し発心せしめて、不退の地に住さしめたまえるをや、と（同、322）

40 われは常にこの娑婆世界にありて、法を説きて教化し、亦、余処の百千万億那由他阿僧祇の国においても、衆生を導利せり（寿量品、下16）

41 方便をもって衆生を教化して、仏道に入らしめんがためにのみ、かくの如き説を作すなり（同、18）

42 如来はこの方便をもって衆生を教化するなり（寿量品、下20）

43 常に法を説きて、無数億の衆生を教化して、仏道に入らしむ（同、28）

44　諸仏、大聖尊の、衆生を教化したもう者、諸の大会の中において、微妙の法を演説したもうに（法師功徳品、98）

45　得大勢よ、彼の時の四衆たる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は瞋恚の意を以って、われを軽じ賤むるが故に、二百億劫に常に仏を値いたてまつらず、法を聞かず、僧を見ずして、千劫、阿鼻地獄において大苦悩を受く。この罪を畢えること已りて、復常不軽菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提に教化するに遇えり。（不軽品、142）

46　諸の法に著める衆は、皆、菩薩により教化を成就して仏道に住せしむることを蒙むれり（同、146）

47　又、わが今日、教化せる諸の菩薩をも見るなり（神力品、162）

48　この一切衆生喜見菩薩は、これわれらが師なり、われを教化したもう者なり（薬王品、190）

教化とは、一切衆生を仏道に導き入れる、ということである。不信・邪見・謗法の盲眼の目を開き、開悟させていく教導・所化の信仰実践である。心田に仏種を「うえる」という営為、顚倒の衆生を成仏に転身させていく精神の変革であり、化転・化導および唱導ということでもある。

法華経に生きる教主釈尊は、五欲に執着し妄見の網にかかって軽慢、背信に沈輪し、病み、苦悩する衆生を救済するために、教化し法華経の世界に導き入れることを本願としている。

「われ、本、誓願を立て、一切衆生をして、われの如く等しくして、異ることなからしめんと欲せり。わが昔の所願の如きは、已に満足し、一切衆生を化して、皆仏道に入らしめたり」（方便品）

「諸仏の本の誓願は、わが行ぜし所の仏道を普く衆生をして、亦、同じくこの道を得せしめんと欲するなり」（方便品）。

「常に法を説きて、無数億の衆生を教化して、仏道に入らしむ、爾より来無量劫なり」（寿量品）

「毎に自らこの念を作す、何をもってか衆生をして無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめん、と」（寿量品）

過去も現在も、そして未来をも包みこんだ限りない教主釈尊と諸仏の誓願および救護の悲願が、これらの言葉に語られている。それは無限に広大で深い仏の世界に、苦の衆生を化導していく救済精神の表出である。同時に仏の誓願や三世説法の儀式が「教化」という正法への覚醒を通して仏道帰入に直結していくものであることをも、あわせて明示している。毒に狂い本心を失なった子が良薬を飲んで病いを治癒したのは、父の死を聞いて「常に悲感を懐き、心は遂に醒悟せり」という「めざめ」の心へ蘇生したからで

ある。「舎利弗、目連等が三五の塵点を経しことは十悪五逆の罪にもあらず、謀叛八逆の失にてもあらず。但だ悪知識に値うて法華経の信心を破りて権経に移りし故なり。天台大師釈して云く、若し悪友に値へば則ち本心を失う云々。本心と申すは法華経を信ずる心なり。失うと申すは法華経の信心を引きかへて余経へうつる心なり」（兄弟抄）と日蓮聖人は示している。仏の熱愛の眼と獅子吼は、法華経の信心を失なった衆生の本心を開発しよみがえらせることに注がれている。法華経から余経にうつって本心を失なった者に対して、仏は再び余経を「引きかへて」法華経へと「うつる」再生の仏語を出世の本懐として語ったのである。衆生が邪見・謗法の存在である故に、たんに「法を説く」だけでなく邪見・謗法を「悔返し」、「信仰の寸心を改めて実乗の一善に帰せよ」と諫暁していく蘇生・化転の教化を必要としたのである。したがって、教化は背信から人々を蘇生させ、本心を失なった不信謗法の者の心を開悟し不成仏の存在を成仏に導き入れるという意味を持つのであり、これは「妙の一字」と同義である。仏が無上の法輪を転じ、教化して初めて道の心を発す三世にわたる教化や菩薩・衆生への教化がいずれも阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、そこに住せしめるものであることは、教化の本質が仏道への「めざめ」への化転とよみがえりにあることを示している。

「天台大師の云く、薩とは梵語なり。此には妙と翻ず等云云。私に会通を加へば、本文を黷すが如し。爾りと雖も文の心は、釈尊の因行、果徳の二法は、妙法蓮華経の五字に具足す。我等、此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ。四大声聞の領解に云く、無上の宝珠、求めざるに自ら得たりと云云。我等が己心の声聞界也」（観心本尊抄）。四大声聞の領解は、第一に法華経の題目の受持が釈尊の説法・教化を通じた救魂の仏種を自然譲与されるということ、第二にはこの受持は「妙」と同じであること、第三に声聞が無上の宝珠が自然に譲与されたのは、釈尊の法華経による教化によって、覚醒され教化されたことにもとずくこと、を意味する。法華経の題目受持、妙の一字への帰命が、法華経による釈尊の教化の儀式における本質であった点を明らかにしている。

3

ところで日蓮聖人に従えば、教化の文字のうち「教」とは法華経であり、法華経を一切経の肝心・諸仏の眼目として認識し信受することを意味する。「法華経は一切経の中の第一の経王なりと知るは、是れ教を知る者なり」（教機時国抄）とも「愚眼をもて経文を見るには、法華経に勝れたる経ありといはん人は、設ひいかなる人なりとも謗法は免れじと見えて候」（報恩抄）などとも説示されている。法華経が経王であり、最第一の経であること、余経へ

の信仰にうつる心を捨てて法華経に命を奉り、「仏陀の諫暁を用いる者」となること、ここに法華経によって教化され、教化された存在が同時に国土と一切衆生の教化に献身していくという、日蓮聖人における「教」の自覚が存在している。「化」の文字は、蘇生・開発＝妙の一字と同じであるが、謗法を転じて法華経に帰依させていく諫暁・折伏の意味を持っている。一般的に、化とは最初から最後まで、内部から外部まで、一部ではなく全体にわたって徹底的にやりとげることをいう。部分的に少し実行するとか法華経もよいが他の経も同じようにすばらしいとか信がなくて解だけであったり、私見から経文を見るだけで、仏意に導かれていこうとしない、などの形はいずれも「化」ではない。諸経が随他意なのに比して、法華経は随自意である、と聖人は教える。それは「一切衆生を仏の心に随へり。諸経は仏説なれども是を信ずれば衆生の心にて永く仏にならず、法華経は仏説なり、仏智なり、仏意なり、一字一点も深く信ずれば我身即ち仏となる」（新池殿御返事）という如く、人々を徹底的に仏の心に随順させていくからである。教化もまた、徹頭徹尾「菩薩のため」「衆生のため」に向けられ、一仏乗を宣示し仏身を成就させることのみを目的とする。但、一乗の道のみをもって諸の菩薩を教化するのが仏の誓願であって、三乗を説くのは方便であり「声聞の弟子」のままにしておくことを否定する。また「われは久遠より来これ等の衆を教化せしなり」（涌出品）と語っているように、教化は永続性をもって展開されるのであって、一時的に終わるものではない。教化が菩薩や衆生を対象としてなされたということは、あらゆる存在に向けられるだけではなく、何よりも法華経を敬信する信力堅固なる者、法華経を受持し娑婆世界に流布していく自行化他にわたる「教行者」として、終始、法華経に命を献げていき告勅と付嘱を担っていく、ということである。それ故に、法華信仰の大衆化を口先でいいながら実際は特定の組織や宗派に「小衆」化したり、法華経の大善を語りながら現実には法華経の教説を狭く世俗的に「小善」化したり、法華経は大法であると口にしながら本当は余経を仰いで、法華経を「小法」化することは、たとえ教があったとしても「化」とはなりえない。「法華経より外の四十余年の諸大乗経は皆小乗にして法華経は大乗なり」（守護国家論）という立場にたつことが不可欠である。法華経寿量品において、「小法を楽う徳薄く垢重き者」と示されたのは、法華経の大法を信ぜず、知らず、諸経を大法と思いつつ実際は小乗＝小法を用いている者のことをさすのである。このような「化」の不徹底さもまた謗法として指摘し、専一に法華経の仏道に帰入させる誓願を仏はつねに勧奨し続け、その悲願の実現のあかしを「教化して仏道に入らしむ」と説くのである。

こうした法華経最勝にもとずき、無限に長く、そして深い釈迦仏＝法華経の教化を、〈三世教化の儀式〉と呼ぶことができよう。「唯法華経計りこそ最後の極説なるが故に、已今当の中に此経独り勝れたりと説かれて候へ。されば釈には、唯法華に至って前教の意を説て今教の意を顕すと申て、法華経にて如来の本意も、教化の儀式も定りたりと見えたり」（持妙法華問答抄）。法華経における教化の儀式は、化導の始終不始終を化城喩品で説くことによって、教化の不滅性をあかし、さらに滅後の弘教者が久遠に教化された所化＝本化の弟子である点が示されることによって、三世にわたる教化の儀式として永続されるべきものである点が仏によって諫暁されているのである。

久遠実成の教主釈尊は、諸仏・諸大菩薩・梵天等を弟子とし、化身とする。日蓮聖人は始成の仏であれば、所化の弟子は十方に充満することがない故に「分身の徳は備はりたりとも示現してえきなし」という。また「仏衆生を化せんとをぼせども結縁うすければ八相を現ぜず」とも述べている。しかし久成の本仏であれば、三世十方の仏は教主釈尊の化現であり弟子となるから、十方の弟子たる諸大菩薩もまた教主釈尊の弟子となる。「本門を以て之を疑はば、教主釈尊は五百塵点已前の仏也。因位も又、是の如し。其より已来、十方世界に分身し、一代聖教を演説して、塵数の衆生を教化したまう。本門の所化を以て、迹門の所化に比校すれば一滞と大海と、一塵と大山と也。本門の一菩薩を、迹門の十方世界の文殊・観音等に対向すれば、猿猴を以て帝釈と比するに尚及ばず」（観心本尊抄）。諸仏が釈迦如来の分身たる上は、諸仏の所化はじめ一切は釈尊の弟子であり、しかも本化の弟子は他の一切の弟子に超過する存在である、と示すのである。

寿量品の「六或示現」は、教主釈尊が一切の存在を所化の弟子とし、さらに分身しつつ化導する姿に他ならない。とくに日蓮聖人は大地より出現する地涌千界の大菩薩とその中の四人の大聖について、「開目抄」に法華経の次の一節を引用している。「われは、この娑婆世界において、阿耨多羅三藐三菩提を得おわりて、この諸の菩薩を教化し、示導し、その心を調伏して、道の意を発さしめたり」「われ、菩提樹の下に坐し、最正覚を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、爾して乃ち、これを教化して、初めて道の心を発さしめたり」「われは久遠より来、これ等の衆を教化せり」（涌出品）。これは、「今初発道心とて幼稚のものどもなりしを教化して弟子となせり」と指摘したもので久遠教化の弟子たりえることによって末法における法華経の「唱導の師」が出現する事実を提示したのである。

釈尊の教化に応えた地涌の菩薩が「教化すべきこと難しと雖も、我等当に大忍力を起して、此の経を読誦し、持説し、書写し、種々に供養して、身命を惜まざるべし」と弘

教および教化の決意をひれきしたのも、末世の教化こそ身命を惜しまぬ徹底的な献身と覚悟を必然としていたことを物語っている。三大誓願はもとより、「幸いなる哉、法華経のために身を捨てん事よ。臭き頭を刎たられば、沙に金をかへ、石に玉をあきなへるが如し」（種種御振舞御書）「命をば法華経に奉り、名をば十方世界の浄土にながすべし」（一谷入道御書）と語った日蓮聖人の法華経捨身と忍難慈勝の生は、法華経への教化に身を献げる強靱な決断と釈尊より末世の弘教を付嘱された教化者の自覚の重さをあます所なくしるすものである。「諸法実相抄」に示す次の一文は、日本第一の法華経の行者が、法華経を付嘱された地涌の菩薩として久遠の昔より教化された仏の弟子であり、末世の教化者でもあることを明白に指摘している。

「いかにもして今度信心をいたして法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給ふべし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑わんや。経に云く、我久遠従り来、是等の衆を教化すとは是れなり」。

久遠の昔に教化された仏弟子として、法華経の如説修行に励み、習学に精進し、地涌の菩薩として末世の教化を展開する法華経の行者の信仰共同体、日蓮聖人を唱導の師と迎ぎつつ教化の法戦にたち向う地涌の菩薩集団。それが本化の「日蓮が一門」の特質である。この日蓮一門における信仰実践の基本目標こそ次の指導方針に他ならなかった。

〈一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ。あひかまへて、あひかまへて、信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給ふべし。行学の二道をはげみ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし〉（諸法実相抄）――。

日蓮の門弟と名のる者は、釈迦仏・法華経の信仰教説を誠心誠意、心を一つにして信受し、行学につき進み、法を説き、教化するために献身せねばならない。それは、知識の獲得やていさいのためではなく、何よりもまず自らが「教化される」ことによって、地涌の菩薩＝久遠教化の弟子としての使命を担い、国土と一切衆生を救護していくためであり、経の真実性を身証していく道だからである。

二、教化と仏恩・法恩

法華経の説示した二乗作仏の教説は、諸経において永不成仏と嫌われてきた二乗に成仏の受記を与えた教化の儀式である。釈尊は、法華経を語り二乗を「悔還」させて所化の仏弟子と定め、法華経の大法を信受し弘通する立場に二乗の心を転換させたからである。

法華経信解品に述べられた四大声聞の領解は、「深く自ら、大善利を獲、無量の珍宝は求めざるに自ら得たり」「

われ等は今日、仏の音教を聞き、歓喜し踊躍して、未曾有なることを得たり。仏、声聞は当に仏に作ることを得べし、と説きたまいしをもって、無上の宝聚は、求めざるに自ら得たればなり」と表白されている。

これ以前の二乗は、生死の熱悩に心さまよい、ただ小法に安住してこれを楽しみとし「諸法の戯論の糞」に迷惑する存在であった。仏法の宝蔵が説かれていながら、自ら志願して聞き、そして信ずることもなく、自らは法を得たと思い、仏慧を具えて一切衆生を救護する身になろうともせずに、これ以上に求めるものはない、と考えてきた人々であった。仏が国土を浄め、衆生を教化することを聞いてもまったく欣楽することすらなく、仏の教化によって菩薩が無上正等覚に住するのを見ても一念の随喜を起すこともなかった。自らの苦悩をなくせば仏の教えを信受したことになるとし、「仏の恩」に報ずることも実現したとも思いつづけていたのであった。この二乗のような告白は、小法をもって大法を信じていると思い惑い、仏の教化に背を向けつづけてきた「展転」の姿を語るものであった。とくに、自身の清浄な生活を利するだけの自利を求める小法への欣楽が、仏恩に報じる道ではない、という観点がここでは強調されている。自己一身の苦にとどまらず国土と一切衆生の苦をとり除き、法華経の大法を信じて菩薩の利他行に励むことが、仏の誓願であり喜悦であり、この仏の誓願と喜びにこたえていくこと、法華経の弘通に献身していくことそのものが真の報恩である点が語られていく。

小法に安住する二乗への批判は、この自利至上主義と仏恩に背く点に集約されている。大集経にもこのことについて「畢竟して恩を知り恩を報ずること能はず」「人有りて深坑に堕墜し、是の人自ら利し他を利すること能はざるが如し」と示されている。信解品では「われ等は長夜に、空法を修習して、三界の、苦悩の患を脱るることを得、最後身の、有余涅槃に住せり。仏の教化したもう所は、道を得ること虚しからざるとき、則ち已に、仏の恩を報ずることを得たりとなすなり。われ等は、諸の仏子等のために、菩薩の法を説きて、もって仏道を求めしと雖も、しかもこの法において、永く願楽することなかりき」と、二乗の自己批判として告白されている。この姿について日蓮聖人は「二乗は自身は解脱とをもえども、利他の行かけぬ。設ひ分分の利他ありといえども、父母等を永不成仏の道に入るれば、かへりて不知恩の者となる」（開目抄）と示したのである。

釈尊は、小法の自利に安住する二乗の「志の劣なる」その心を調伏して法華経の大宝・大智を教示し、成仏の証明を授けた。「先の望む所に非ざるを、しかも今、自ら得ること、かの窮子の、無量の宝を得たるが如し」という二乗の随喜は、法華経信受者となることによって仏より「自

然」に教化された蘇生の心を現わしたものである。

二乗が、自利に甘んずることなく「大善利」を獲得し、「展転」の心を法華経の一仏乗に化転して仏子の自覚に立ちえたということは、小法を究極としてきたあやまちを転じ、救済を約束する「仏の音教」のさし示した教化のしるしに他ならない。「世尊は、大恩にましませば、希有の事をもって、無量億劫にも、誰か能く報ずる者ならんや」という仏の大恩への讃歌は、仏智を体得できぬ者に対して深く限りない慈悲をたたえながら教化に努める釈尊の教勅を、担っていく心から表出したものである。声聞・縁覚の二乗をはじめ悪人提婆や竜畜下賤の女人成仏は、いずれも法華経の限りない救済性をしるすものである。聖人はここに「法華経の恩徳」を見出し、諸経における不成仏を転換・化導させて法華経を行じ仏と成て「日輪を四州の衆生の仰くが如く、輪王を万民の仰くが如く、仰がれさせ給ふ」かれらの姿を、「法華経の恩徳にあらずや」と述べている（祈禱抄）。

仏の大恩に報いる道は、手足となって仏のためにつくし、頭を地につけて礼敬し、一切を供養しても報じえぬほど深い。仏を頭に戴き両肩に背負い、無限の時にわたって尊敬しつづけ、塔廟をたて宝衣を地にしきつらねて供養してもなお報いることはできない。仏の教化によって法華経に覚醒した二乗の精神が仏恩への讃嘆と大恩に報いる誓願として語られている。〈報恩の誓願〉である。このような報恩教化の決意は、仏の教化によって生み出された。〈報恩への教化〉である。報恩の教化は、しかし美膳宝衣をささげたり、塔廟を建てたりすることのみにとどまるものではない。仏の正法＝法華経を弘め、一切衆生を教化して仏とする、という仏の誓願、出世の本懐をこの世に実現するために、一切を献げて「仏道の声」をあらゆる人々に聞かせ、法華経の恩徳を分け与えていくこと、それが敗種を再生し、仏種を「妙の一字」の教化によってよみがえらせた釈迦仏・法華経の大恩に報いていく二乗の覚悟として示されたのである。聖人は、さらに「仏と法華経の恩の報じがたき事」を述べた二乗にとって、「此経を行ずる者をば、父母よりも愛子よりも両眼よりも大事にこそおぼしめすらめ」と、法華経の行者を守護する任務を二乗が担っている点を指摘している。敗種とされていた二乗は、「おもはざる外の幸」をえて、宝の山に入った心地がしたのである。そこで、領解の文で「無上宝珠不求自得」と語ったのである。それ故に「一切の二乗界、法華経の行者をまほり給はん事は疑ひあるべからず」「いかでか我成仏を遂げたらん法華経を行ぜん人をば捨つべきや」と示すことによって、法華経の行者への守護を、大恩に報じていく二乗の報恩行為としてとらえている。こうして蘇生した二乗は、「仏道の声をもって、一切をして聞かしめん」という自利

利他の菩薩行に励む報恩の「憐愍教化」にとりくむことを誓願したのである。

日蓮聖人は、次のように教えている。法華経は仏＝親が子を教えた教であり、法華経寿量品を知らぬ者は「子の父をしらざる」故に「不知恩の者」である（開目抄）。釈尊は、六道四生の一切衆生を父母と見て仏道に励み、法華経を習いきわめて悟って仏となった。そして、一切衆生、すなわち父母を法華経に導き入れようと励んだ。この功徳を備えることによって「第一の孝養の人」といわれるのである。しかも、釈尊は、この父母孝養の功徳の結晶を法華経の文字に書きあらわし、法華経信受の人に譲与して一切衆生を仏にしようと励みつづけている（法蓮抄）。「親も親にこそよれ、釈尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主にこそよれ、釈尊ほどの師主はありがたくこそはべれ」（南条兵衛七郎殿御書）。釈尊を「大恩教主」と讃称するのは法華経をもって衆生救済に励む「教化主」によって、自利小法の精神を変革され、「教化された」法華経信受者として、報恩を誓願した声である。

「大通智勝仏の十六王子、十方に土をしめて一々に我弟子を救ひ給ふ。其中に釈迦如来は此土に当り給ふ。我等衆生も又生を娑婆世界に受けぬ。いかにも釈迦如来の教化をばはなるべからず。而りといへども人皆是を知らず。委く尋ねあきらめば、唯我一人能為救護と申して釈迦如来の御手を離るべからず」（善無畏三蔵抄）。さらに日蓮聖人は次のようにも語っている。

「我等が父母世尊は主師親の三徳を備て、一切の仏に擯出せられたる我等を、唯我一人能為救護とはげませ給ふ。其恩大海よりも深し、其恩大地より厚し、其恩虚空よりも広し」（同前）

汚濁にまみれた我々の救済を誓願し、教化に励む釈迦仏との永遠なるきずなを信ずること、そこに知恩が自覚され、報恩をめざす教化が生れる。しかも、釈迦仏・法華経への不退転の信心、その救魂のまなざしに導かれながら、自他の救護につとめる教化。報恩はすでにそのうちにあるということであろう。

この大恩教主釈尊の音声は、法華経の文字となり、一切経となって一切衆生を到益する。その釈尊もまた、「内典の孝経」「実の報恩経」たる法華経の教説を開悟することによって、一切衆生を教化する「法華経の恩徳」を体現した仏であった。法華経の大恩に報ずる証しが、衆生を、法華経の仏道に帰入させていく教化として実現しているのである。「今法華経の時こそ女人成仏の時、悲母の成仏も顕はれ、達多の悪人成仏の時慈父の成仏も顕はるれ。此の経は内典の孝経なり」（開目抄）という法華経の恩徳なくして、一切衆生の成仏を約束する仏の誓願もなしとげることはできない。「我が滅後に於ては誰か能く此の受持し読誦

せん。自ら誓言を説け」という告勅の宣示は、法華経の恩徳に報じていく釈尊自らの誓願を付嘱したものであり、〈報恩の誓願〉をひきついで、苦難をたえ忍び、憐愍教化していく所に〈報恩の教化〉への誓言が要請されたのであった。そしてまた「堪忍する所に随いて、無量の喩えをもって、ために法を説き」」示していく説法がなされていくというのである。日蓮聖人が「仏弟子は四恩を知って、知恩報恩をほうずべし」（開目抄）といったのは、法華経の恩に報恩した釈尊の大恩によって教化されたその魂から発せられた聖人の〈報恩の誓願〉を述べたものである。しかも聖人は、法華経を身証し、受難に値った時に「仏法を習ふ身には必ず四恩を報ずべきにて候か」と語った（四恩抄）。五箇の勅宣を示す仏の諫暁を体して、法華経の題目をひろめて一切衆生を教化していく法華経の行者日蓮の生は、「命を惜みて云はずば国恩を報ぜぬ上、教主釈尊の御敵となるべし」という思い切りに立つものであった。その覚悟は、「仏恩重きが故に人をはばからず申しぬ」という仏のよびかけた〈報恩の誓言〉にこたえ、それを担いつつ釈尊の報恩を報じていく道すなわち仏恩に報いていくことに他ならなかった。日蓮聖人が立教開宗に際し、虚空蔵菩薩と師道善房の恩に報い、師を導こうとした、という姿は法華経の智者・行者へ自らが教化されたささえとなり、法華経に開花させてくれた根となった存在に報恩をささげていくことを意味している。それは法華経によって「教化された」日蓮聖人が、自利に安住することなく、利他の化導に向うことによって報恩の教化に励み、報恩の誓願を実行したということである。さらに、「立正安国」の諫暁は、「これひとえに国土の恩を報ぜんがため」（安国論御勘由来）とするものであった。「立正安国論」は法然を批判しつつ「信仰の寸心を改めて実乗の一善に帰せよ」と勧奨されている。法華経では、一切衆生の救済がひろく「国土を浄める」ことと連環して説かれ、教化もまた浄仏国土への教化と一切衆生の教化と切り離されることはない。「仏土を浄めんがための故に、常に仏事を作して、衆生を教化せるなり」（受記品）「われは常にこの娑婆世界にありて、法を説きて教化し、亦、余処の百千万億那由他阿僧祇の国においても、衆生を導利せり」（寿量品）。

仏の教化は、何よりも仏国土を浄めることをめざしている。この国土にいる衆生を教化していくことなしには仏土を浄めることはできない。また衆生の教化は、仏土を浄めて「我が此土」を安穏していく仏国土厳浄に包みこむひろがりのなかで成就される。いうまでもなく、仏国土とは、仏の住する浄土をいう。同時に仏が教化に励む所をも仏国土である。この娑婆世界は、教主釈尊にとっての化土である。この世界に住む衆生の盲眼を開き、邪見誘法を教化する釈尊の教化地という点で、娑婆世界は仏国土であり、

「釈尊の本土」（下山御消息）である。日蓮聖人が、釈尊を娑婆世界の主師親とし、この世界のすべてを「釈尊御所領」と指摘したのは、浄仏国土と衆生教化がこの世界を離れてはありえない点を明示したものであった。法華経もまた「今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」（譬喩品）と語る。娑婆世界はほんらい仏国土である。しかし娑婆即寂光土、という教示は娑婆世界をアプリオリに寂光土とするという意味ではない。この仏国土を「寂光土」に転換していく教化によって、謗法の穢土をうちかえして仏国土を浄めることになりえるのである。「即」とは、化す、教化のことである。この「浄める」ということが、仏国土における教化実践の姿であり、「立邪謗国」を「立正安国」へと変革していく諫暁は、仏国土において穢土から浄仏国土へ教化していくという行動である。これを、衆生教化に対して浄仏国土教化ということができよう。信解品のいう窮子が遠い国々に流浪していた姿は、この浄仏国土教化に背きつづけたありようを語っている。しかも二乗は「但・空・無相・無作のみを念じ、菩薩の法たる、神通に遊戯し、仏国土を浄め、衆生を成就することにおいて、心は、喜楽せざりしなり」という心的状態であったのである。自利のみを想う小法は、法華経の大法を忘れ、狭い世界に安んじて、国土を浄め衆生を救う仏の広大な教化に違背し喜悦の心を生ずることがない。仏の大恩に気づかず、仏国土の恩を知ることもない。穢土を避け一身の清浄な生活を願うだけであって、穢土を浄仏国土へ化すことを拒否し、忘却する姿が、ここに述べられている。

日蓮聖人が法然批判をしたのは、たんなる個人批判でもなく念仏排撃でもない。法然が法華経の大善を忘れて浄土三部経に限定して一部分に偏し正統を忘れて釈尊一代の教説を破壊したからであり、十万億のかなたにある西方浄土を願い、法華経の恩徳に報いて衆生教化に励み、世界の仏国土を浄める教化を失わせていたからであった。法華経を修行する者の住処を浄土と思うべきであって、どうして煩しく他処を求める必要があろう。西方浄土を願うのは「瓦礫の土を楽しむ」ものである、と聖人は語った（守護国家論）。こうした法然の行実は、法華経に教化される以前の二乗の姿をそのまま写しだすものであった。自利・不知恩の二乗批判こそ、法然批判に通底していくものであり、それは釈迦仏・法華経の大恩を報じつつ教化していく道でもあった、というのが法然批判の根本的理由である。邪見謗法の朦霧から為政者や一切衆生を覚醒していく諫暁は、こうして衆生教化を包摂しながら浄仏国土教化に直結していく。「信仰の寸心を改めて実乗の一善に帰せよ」という諫めは、謗法邪見を法華経に転換させていく教化を示すものである。「改めて」とは教化のことである。それは、個人の

教化だけではなく、三界が皆仏国—宝土であるという浄仏国土への覚醒と浄仏国土化として帰結している。これは「穢土を浄土へ」「仏国土を浄めよ」という法華経の教説を体したものといえるのであり、それを法華経に生きる釈尊の大恩にこたえ、仏土を浄める報恩行為として受けとめていた所に、「国土の恩を報ぜん」という言葉が叫ばれたといえるであろう。それは主師観の三徳を具備し、娑婆世界の一切衆生を救済せんとする釈迦仏の教化にこたえ、釈迦仏の本意に叶う道をしてとらえていたからである。

三、日蓮聖人と教化

1

日本第一の法華経の行者・日蓮聖人は、法華経を身証し、「仏記を扶け如来の実語を顕わさんが為」に献身し続けた。内相承の観点からいえば、釈迦仏・法華経への直参至上を根本とする。「専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべきか」（報恩抄）と述べたのは、この立場を明示したものであった。同時に、日蓮聖人は次のようにも示している。

「天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す等云々。安州の日蓮は恐らくは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加へて三国四師と号く」（顕仏未来記）。日蓮聖人は、釈尊—天台—伝教—日蓮と継承する法華仏教の系譜（外相承）に立って、末法第五の五百年に法華経の題目を弘布し、謗法の日本と一切衆生を救済するために策励した基本的姿勢を、この言葉は示している。法華経のあかした永遠なる救済性をしるし、国土と人間を教化して仏語を扶助することが「法華宗を助ける」相承者の任務であったことが語られている。「我が門弟これを見て法華経を信用せよ」「法華取要抄」と日蓮聖人が「我門弟」「我弟子檀那」に呼びかける法華経帰命の精神は、もとより一宗一派に限定されるような狭い意味の「宗」ではない、また日蓮—弟子檀那との単なる師弟間の指導・被指導のつながりに限られるものではなかった。一切経の肝心・諸仏の眼目であり、教主釈尊出世の本懐たる法華経を肝要とする「法華宗」を、釈尊より付嘱された仏使上行の自覚に立って、日蓮聖人は相承し担いつつ、本化の弟子として末法に宣揚しようとしたのであった。

法華宗を助ける法華経の行者・日蓮聖人をリーダーとする末法日本の法華信仰の共同体は、何よりも「仏経と行者と檀那と三事相応して一事を成ぜん」ことを法戦の基本方針とし、弘通・諫暁・講説そして教化に取組んだ。また、「よき師とよき檀那とよき法と、此の三つ寄り合ひて祈を成就し、国土の大難をも払ふべき者なり」（法華初心成仏抄）とも語られている。「仏経」とは、釈迦仏・法華経の

ことである。「よき法」は、最第一の法華経を意味する。「行者」とは、法華経を信受し法華経を説の如くに修行し習学に励み、教化をめざし、法華経を血肉化していく者のことである。聖人は「よき師」について次のように教示している。「よき師とは、指したる世間の失無くして、聊のへつらふことなく、少欲知足して慈悲有らん僧の、経文に任せて法華経を読み持ちて人をも勧めて持たせん僧をば、仏は一切の僧の中に吉第一の法師なりと讃められたり」。また「よき檀那」とは、貴人だからといって敬まったりせず、賤人に対しても憎むことなく、「上にもよらず下をもいやしまず」、一切の人の言動を用いずに「一切経の中に法華経を持たん人」のことである、と述べている（同前）。

この〈釈迦仏・法華経〉〈法華経の行者〉〈法華経信受の檀那〉の三者が異体同心し、水魚の思いを抱き、あい呼応して法華経の救済を実証していく教化の営為を、聖人は「法華宗」を助け、宣揚流通していく信仰共同体の実践とみなしたのである。この三者の「三事相応」が法華教団を構成するモメントであった。

2

ところで、日蓮聖人のさし示した門弟に対する教導の根本的姿勢は、〈釈迦仏・法華経〉の信仰教説に身命を献げよ、と策励しつづけた所にあった。

「各各我弟子となのらん人々は一人もをく（臆）しをもはるべからず」（種種御振舞御書）

「とにかくに、死は一定なり。其時のなげきは、たうじのごとし。をなじくは、かりにも法華経のゆへに命をすてよ」（上野殿御返事）

「されば我弟子等心みに法華経のごとく身命もをしまず修行して、此度仏法を心みよ」（撰時抄）

これらの言葉は、法華経に対する捨身の覚悟と不惜身命の尊さを教示した日蓮聖人の肉声を伝えている。この捨身の精神は、法華経の題目＝南無妙法蓮華経と同じことである。南無とは、「一心に仏を見奉りて身命を惜しまず」ということである。すなわち帰命のことである。帰命は「我が命を仏に奉る」ことを意味した。最も大切なものを仏に献げる志のことでもあった。日蓮聖人は、法華経を身証することによって、法華経の真実性を眼前に示し、末法の日本と一切衆生の救済に努めた。法華経の題目を行ずることもまた、たんに口で唱えるだけではなく、信唱しつつ、「身唱」することによって、釈尊における救済の悲願をあかしとどめたのである。その法華経献身のあかしが何ものをも恐れぬ不退転の勇気といかなる苦難にも屈しない捨身として現れる、というのである。

聖人は、「死は一定」という生の重みを見すえながら、

法華経によって生命を永遠に燃焼させ、しかも法華経に死所を求める人生の覚悟をさし示した。それは同時に、法華経の行者として生き、仏の使いと名のる者の持つべき信仰の覚悟であり、法華経への捨身によってこそ生死の奥底をきわめ、人間の精神を強靱に鍛える再生・転身の力＝教化となる事実を証明しようとした。日本第一の法華経の行者・日蓮聖人は、先頭にたち身をもって法華経に命を捨て、門弟に向って法華経献身の覚悟をよびかけたのである。次の言葉は末法における教化への献身が、謗法者との法戦にたち向い、命を法華経に奉る覚悟をもって実践化されねばならない姿を映しだしている。いっきょに釈迦仏・法華経の諫暁・誓願にこたえていく日蓮一門の魂の叫びである。

「仏滅後二千二百二十余年が間、迦葉、阿難等・馬鳴・竜樹等・南岳・天台等・妙楽・伝教等だにもひろめ給はぬ法華経の肝心諸仏の眼目たる妙法蓮華経の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に日蓮さきがけしたり。わとうども（和党共）二陣三陣つづきて、迦葉・阿難にも勝ぐれ天台・伝教にもこへよかし。わづかの小島のぬしら（主等）がをどさんを、をじ（恐）ては閻魔王のせめ（責）をはいかがすべき。仏の御使となのりながら、をく（臆）せんは無下の人々となりと申しふくめぬ」（種種御振舞御書）。

このような捨身の決断は、六難九易を説示した宝塔品の精神を聖人自らが信受し、諫暁として聞いたことにもとずくが、それは不惜身命の生き方が仏の永遠なる命として蘇生しえる種となることを確信していたからである。

日蓮聖人は、弟子たちに念仏は無間の業、禅宗は天魔の所為・真言は亡国、念仏者・禅僧・律僧の寺を焼払い、頸をはねよと語り、最明寺入道（北条時頼）・極楽寺入道（北条重時）を阿鼻地獄に堕ちた、と述べたことがあった（光日房御書）。「日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心にたらず、国の恩を報ずべき力なし、今度頸を法華経に奉りて其功徳を父母に回向せん。其あまりは弟子檀那等にはぶくべし」と語ったこともあった（種種御振舞御書）。「天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穏ならざる事をなげかざれ。」と教示もした。（開目抄）。これは、法戦に一身を投げだして日本国と一切衆生の救済に励む日本第一の法華経の行者による魂の大音声である。捨身による自他教化を実現していく日蓮一門の覚悟と決断を意味した。これらの言葉は、いずれもみな朝夕に語り昼夜に談じてきたものであった。邪見謗法の者を折伏諫暁し、四恩に報じていく法華経への捨身なくして教化することはできない、という思い切りが日蓮聖人と門弟との「約束」として、日蓮一門における法華経弘通の紐帯となっていたのである。

左衛門の尉申すやう。只今なりとな（泣）く。日蓮申すやう。不かくのとのばらかな。これほどの悦びをばわらかへし。いかにやくそく（約束）をばたがへらるるぞ。

（種種御振舞御書）

この約束とは、法華経に帰命した師弟の契約であり、仏の永遠なる命として再生していくという法華経献身における三仏との約束をも意味していた。

しかし、日蓮聖人はこの「約束」が、弟子たちによって忘れ去られる危険にたえずさらされていたことを見落していない。じじつ、竜の口頸の座を契機とする日蓮一門の迫害の中で、多くの弟子檀越は約束を破り棄てて退転していった。疑いをおこして法華経を捨て、遂に法華経と日蓮聖人に敵対する者も現れた。しかも「かへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等」は「日蓮御房は師匠にてはおはせども余りにこはし。我等はやはらかに法華経を弘むべし」と述べたという（佐渡御書）。不惜身命の覚悟を棄てた人々は、たちまち邪見謗法者や小法のみを願う二乗＝不知恩の者に転落していく。生の危機を見すえた所で、日蓮聖人は法華経のために命をささげよ、と策励してきたのであった。しかもなお、日蓮聖人は「つたなき者のならひは約束せし事をまことの時はわするゝなるべし。妻子を不便とをもうゆへ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか。仏道のためにはなれしか。いつも同じわかれなるべし。我法華経の信心をやぶらずして、霊山にまいりて返りてみちびけかし」（開目抄）。

日本の柱たる日蓮聖人にとって、何よりも大切なことは、法華経の信心を貫き通すために、生死を決断して生きぬくことであった。法華経の行者＝仏使として、末法の日本国と日本の一切衆生を救済するという、巨大な誓願を身心に抱いて生きぬくという点にあった。眼前の事態に直面して、大いなる願いを中途で放棄して自己を限定し、合理化することは法華経の信心を破ることに他ならない。釈迦仏・法華経の世界に住して、仏眼をもって肉眼・邪眼を開目させていく教化に取組み続ける、そこに日蓮一門の根本的立場がある、とさし示したのである。法華経の恩徳を受けとめ、仏語の真実性・尊貴性・永遠性をしるしとどめていくことによって、釈迦仏・法華経の教化を担いえるというのである。「返りてみちびけかし」というよびかけは、能化たる仏と所化である門弟とが一体となって、この誓願を実証し成就していく教化の持続的奪闘を意味した。

3

日蓮聖人は、各地の信徒が直面した苦悩・悲嘆に応えて、積極的に教化指導を行ない法華経の信仰に生きるよう励まし続けた。信徒のかかえに信仰上、人生上における苦

悩の実態は、主従関係・親子関係・死・病い・災厄等にともなうものであった。また信仰の正邪や後生のありようについてであった。

(イ) 武蔵国池上郷の武士・池上右衛門大夫は極楽寺良観の信者であった。その子宗仲と兵衛志兄弟は、日蓮聖人の帰依者であった。父が兄の宗仲に改信を強要した所から、池上氏の家族内部の対立が起った。宗仲は、父の要求を拒否したのみならず、逆に日蓮聖人への帰依を父にすすめた。怒った父は宗仲を一二七五年（建治元）勘当した。所領を没収して弟の兵衛志に譲与しようとした。弟は、父と兄との対立の渦中におかれた。宗仲の勘当は一旦許されたが、一二七七年（建治三）再び勘当された。弟は、父と兄との葛藤に苦慮しながら、その対立解消に努めた。聖人は、宗仲と兵衛志夫婦の指導に努め、法華経信仰を貫くよう激励した。兄弟夫婦の不退の信仰によって、宗仲の勘当は許され、父もまた日蓮聖人を信奉するに至った。

日蓮聖人は、邪見の父母に責められるのは、法華経を行ずる者にとって当然の事態であり、過去の重罪を滅するあかしである、と説いた。「現世の軽苦忍びがたくして、慈父のせめに随ひて存の外に法華経をすつるよしあるならば、我が身地獄に堕るのみならず、悲母も慈父も大阿鼻地獄に堕ちてともにかなしまん事疑ひなかるべし」（兄弟抄）と述べている。大道心をもって、父母の孝養をはたしていく真実報恩者への道をさし示した。親権にもとずく一方的な孝の強要を否定し、法華経の敵となっている父を正法に帰入させる努力そのものに報恩孝養の実践がある、と教え続けた。兵衛志に向って、「法華経のかたきなる親に随ひて、一乗の行者なる兄をすてば親の孝養となりんや。せんするところ、ひとすじにをもひ切って、兄と同じ仏道をなり給へ」と語った。すこしも恐れることなく、障害をのりこえて、法華経を信じて仏になり、そむきし親を導く生き方を説き示した（兵衛志殿御返事）。日蓮聖人は、池上兄弟・夫婦の信仰的同心を策励し、「いよいよをづる心ねすがたをはすべからず」「がうじやうにはがみをしてたゆむ心なかれ」（兄弟抄）と不退転の勇気と決意をもって生きぬくよう要請した。それは、法華経の恩徳に包まれた親と子の信仰的きずなに転換していく信仰生活の姿と報恩孝養の生活実践を意味した。「世をすてゝ仏になれと申すをやは一人もなきなり」（兵衛志殿御返事）という親のもつ実利性と仏道への道を閉ざす平凡な精神に挑戦し、「一切はをやに随うべきにてこそ候へども、仏になる道は随はぬが孝養が本」という仏道への飛躍に押しだして家族一同の目を開かせたのが、日蓮聖人の教説であった。日蓮聖人はまた、法華経の敵＝謗法の父の罪を滅していく諫言に励み、兄弟夫婦の心を一つにして法華経信仰を貫き通す主体的自覚と「思い切り」の人生こそ、法華経による真の孝養

とみなした。うわべの平穏さが崩れ、親権が行使された時、子の立場にあってしかも正法を信ずる者は、謗法に屈せぬ大道心をもって法華経と日蓮聖人の教説を迎え入れ、それに導かれることによって遂に真の孝養者の道を歩き直したのであった。

(ロ) 一二七七年（建治三）には、熱烈な日蓮聖人の帰依者、四条金吾頼基の身にも事件が起った。頼基は、北条氏一族・江間（名越）光時の近臣であった。光時は、時頼の叔父に当る。時頼が執権になった直後、実権を奪おうとして破れ伊豆に流され、やがて赦された人物であった。光時は、極楽寺良観の信者でもあった。四条氏は、父子二代にわたり「命を君にまいらせたる」（頼基陳状）程に忠誠を尽くしてきた御内の臣であった。一二七四年（文永十一）二月十二日に勃発した北条時輔の乱の際に、唯一人伊豆国から箱根山を越え、主君の前に馳参じて自害の決意を現わした八人の近習の一人に名を列ねた程であった。それ以来、光時は「大事小事に付けて御心やすき者」として頼基を遇していた（同前）。

ところが、この前年頃から頼基は御内人の近習、同輩の者から讒言を受け、一時は訴訟になるかどうかまで問題となった。頼基は、これを歎き、御内人から退去しようと思いつめた。主君が新恩の所領を与えようとしても、これをきらった。「日蓮がゆへにめされて候へば、いかでか不便に候はざるべき」と語っているから、日蓮聖人に帰依する頼基の態度も同輩が讒言した理由の一つであったらしい。

聖人は、江間氏が頼基にとって大恩の主である上、かつて日蓮聖人と門弟が鎌倉において弾圧を受け、弟子の多くが所領を召上げられ追放された中で、頼基の身には何事もなかった点を、江間氏から蒙った「ゆゆしき大恩」であると述べた。「このうへはたとひ一分の御恩なくとも、うらみまいらせ給ふべき主にはあらず」とも示し、主観的にはともかく間接的には日蓮聖人と頼基との信仰関係を守護した江間氏の恩を指摘した。その弾圧の時、頼基は日蓮聖人に従って竜の口に同道し依智まで行って引返えしたのである。聖人は、この頼基の行為を黙認した点を恩として評価したのであった（四条金吾殿御返事）。

ところが、近習からの讒奏だけでなく、やがて主従間の亀裂を生じさせる事件が持ち上った。

そのいきさつは次の如くであった。一二七七（建治三）年六月九日、日蓮聖人の弟子・三位房が、頼基の宿所を来訪してきた。三位房はこう言った。「この頃、竜象房という天台僧が京都より下ってきて、大仏殿の門の西・桑カ谷に住み日夜に説法していると言う。彼は、仏法にご不審ある人は来て問答しようと説法しており、鎌倉中の人が釈尊のように貴んでいる。けれども彼と問答しようとする人がいないという噂を聞いた。あそこへ行って問答を行ない、

人々の後生についての不審をはらそうと思う。一緒に行って聞かれぬか」。頼基は、宮仕えに忙しく、聴聞する気持も起らなかったが、「法門の事」でもあり桑ヵ谷に行った。頼基は、説法の問答を聞きながら、一言も口を出さなかった。

竜象房は、「満座の中に法門に不審の者あらば発言されたい」と言った。三位房は、「諸宗元祖の謗法を批判し、特に法然等は謗法の故に地獄におちることから免れない。その末学の弟子・檀那も悪道におちることも疑いない」と述べた。竜象房は、「上古の賢哲たちをどうして疑うことができよう。自分のような凡僧は仰いで信ずるだけだ」と答えた。三位房は、これを押返して「人師に誤りあれば、経に依れと仏は説かれた。ご房は私の語をもって人師にあやまりがないと言う。三位房は、仏の金言にもとずいて人師のあやまりを指摘したのだ」と述べた。竜象房が「それは誰か」と尋ねたのに対し、三位房は「弘法大師・法然上人等だ」と答えた。三位房はさらに次の点を語った。法門で人を憚り世を恐れて仏説の如く経文の実義を申さぬことは、愚者のきわみであること。悪法が世に弘まり、人が悪道におちて国土が滅する時に、法門をもって諫めるのは法師の任務であること。自分は「当時日本国に聞へ給ふ日蓮聖人の弟子」であり、師はもとより自分も身命を惜しむ者ではない。竜象房程度の智慧で人の不審をはらすことはできない。むしろ師檀共に地獄におちるであろう。今日より後は説法を遠慮するがよい」等と語った。

この説法の座に頼基が同座していたことは、すぐさま主君に報告された。六月十三日には下文が発せられ、頼基の行為が非難された。説法の所に参席したのは穏便ではない、と下文に記され、次の三ヵ条が書かれていた。(1)徒党をくみ兵杖を帯して出入したこと、(2)釈迦・弥陀の如く仰いでいる竜象房と良観を批判してはならず、以後は尊崇すること、(3)いかなる場合も主・親に随うべきこと、である。主命に随うよう起請せよ、とも要求されていた。

頼基は、下文の内容が事実に相違すると述べ、起請文は書かないとしてこれを拒絶した。逆に脅迫をはね返えして、二ヵ所の所領を捨てても法華経を信じ通すと起請した。この後、頼基は日蓮聖人にこの事態を報告した。日蓮聖人は、ただちに「四条中務尉頼基請文」の様式で陳情を書き、事のいきさつと下文に対する見解をしたためて主君への陳弁とした（頼基陳状）。

この中で、日蓮聖人は頼基の姿勢を代弁した。即ち、重恩の主が悪法の者にだまされているのを見て、これを歎き改める諫臣の立場をとっていること。この点を傍輩や世間を憚っていわぬ態度は与同罪（罪を黙認することによって罪を共有すること）となること。頼基は主君の最後を救い「後生までも随従する」者であり、主従二世の契りを結ん

ていること、等について語った。江間氏と頼基の縁は、「頼基成仏し候はば君をもすくひまいらせ、君成仏しましまさば頼基もたすけられまいらせむ」との信仰的関係を基本としていることを表明した。日蓮聖人は、主従関係を頭から否定していない。主の恩と臣の随従・忠誠の関係を前提としたが、一方的な主に対する臣の屈従を拒否した。主のあやまちを正して救う諫臣のあり方を強調したのも、聖人が、「仏法と申すは道理なり。道理と申すは主に勝つ物なり」（四条金吾殿御返事）という姿勢を貫いていたからである。まして、信仰と成仏にとって上下はない。臣の成仏は主の救いとなり、主の成仏は臣の救いに向う。俱に師弟となる如く、主と臣も信仰の次元では互いに師となり弟子となる関係に転換していくというのである。それ故に、世俗的で非道な主命の強要は、いかなる場合も認めることはできない。主に優位する仏法の道理に立つか否か、諫言と成仏をめざすかどうかが問題であった。これは、世俗的な「御恩と奉公」の主従関係を、仏恩とその報恩の契りに高めていく主従関係のあらたな構築を意味した。日蓮聖人のいう〈宮仕え〉のあり方は、身分上の主従関係を仏法の道理を基軸とし相互に救いあう信仰関係を土台にした職業倫理化に他ならない。したがって、主君が現世・後生に悪道に堕ちるならば、主を諫めることを宮仕えの任務とする性格を持っていた。頼基は、主に勝る仏法の道理の体現者・師日蓮を最終的に選ぶことを断言して憚らなかった。「日蓮聖人の御房は三界の主・一切衆生の父母・釈迦如来の御使上行菩薩にて御坐候ける事の、法華経に説かれてましましけるを信じまいらせたる」身であるとの立場から頼基は、「主君をも導きまいらせむ」として宮仕えしてきた、というのである。その故に、頼基を讒言した者は、主君にとって不忠の者であり、頼基が御内を追放されたなら「君たちまちに無間地獄に堕ちさせ給ふべし」と指摘した。

今、江間氏が竜象・良観に同意し起請を書かせるようにしたならば、主君もまた良観等と同罪である。経文の示す道理を知らないからだ、とも語った（頼基陳状）。

日蓮聖人は、この陳状に添えて手紙を送った。頼基が起請文を書かなかった稀にみる毅然とした態度をほめ、これまでの大難の時もそうであったように、今度も二カ所の所領を捨てても「法華経を信じとをすべし」と起請したことを称讃した。頼基のこうした信仰態度が、良観・竜象等に追随する者の策動を打破し、「鎌倉の内に日蓮が弟子等一人もなくせめうし」なわれる崩壊を防いだからであった。

日蓮聖人は、頼基に一層の信仰的決断をうながした。「わづかの二所の所領なり。一生はゆめの上、明日をご(期)せず。いかなる乞食にはなるとも、法華経にきずをつけ給ふべからず」「すこしもへつらはず振舞仰せあるべし。」

中中へつらふならばあしかりなん。設ひ所領をめされ、追ひ出し給ふとも、十羅刹女の御計ひにてぞあるらむとふかくたのませ給ふべし」。

わざわいを転じて幸いとし、大なる騒ぎは必ず大なる幸いに変わる、と激励した。自分から所領を捨ててはならない。主より召上げられたら、「法華経の御布施、幸いと思ふ」と主張するがよい。返えすがえすもへつらってはならない。所領は主より給与されたのではなく、主の大病を法華経の薬をもって助けたことにより与えられた所領であるから、没収したなら病気は再発する、その時用いようとしてもすでに遅いことになろう、と断言してくるがよい、とも対処の方法をさずけた。さらに、昼の酒盛りをしてはならぬ、夜は用心を厳重にし、兄弟一諸にいるがよい。今度、御内を追放されれば十中八・九は命を狙われるからだ、決して犬死してはならぬ、とこまごまと指示をも与えた（四条金吾殿御返事）。

日蓮聖人は、頼基の無事と決意を貫き通していく姿を胸に刻みつつ、釈迦仏・法華経・日天に祈った。頼基が何よりも「法華経の命を継くべき人」と思うからであった（四条金吾殿御返事）。

江間氏は病床に臥した時、頼基は医術をよくした所から主の治病に努め全快させた。一二七八年（建治四）初春には、江間氏の出仕の時、その供の一人となった。供奉者の中で「中務のさえもんのじやう第一なり。あはれ（天晴）をとこやをとこや」と鎌倉の童はささやきあったという（四条金吾殿御書）。

日蓮聖人が「主の御ためにも、仏法の御ためにも、世間の心ねもよかりけり、よかりけりと、鎌倉の人々の口にうたはれ給へ」と希望した通りとなった。「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり」とも述べ、「心の財」をつむようすすめた。それは、釈尊出世の本懐＝法華経への信仰を貫きながら、主従関係のうちに宮仕えしていく「人の振舞」の根本であったからである（崇峻天皇御書）。

(八) 一二七六年（建治二）、故郷の光日尼から手紙が送られてきた。光日尼は、日蓮聖人が幼少の時、虚空蔵菩薩に智者となしたまへと立願したことを知っている程の人であった（破良観等御書）。また佐渡流罪中には供養を献げ、日蓮聖人をかげながら信奉してきた女性であった（光日房御書）。

日蓮聖人は、光日尼からの手紙を心もそぞろに急いでひらいた。ところが、そこには一昨年の六月八日に、わが子の弥四郎に先立れたと書かれていた。

日蓮聖人は、安房弘教の折に顔を合せた弥四郎のおもかげを追い求め、宮仕えする武士の身として一命を失なうことがある、と語っていたことを想い浮べた。その折、弥四

郎は「後生こそをそろしく候へ、たすけさせ給へ」と教示を仰ぎ、もしやの事があったなら、やもめの母を「御弟子にしてほしい」と懇願したありし日の姿をも想起した。

日蓮聖人は、母の嘆きをおのれの憂苦としながら、弥四郎との出会いをこのように語り、亡き子と母の救済を示した。

日蓮聖人は書いた。「をやこのわかれにも、をやはゆきて子はとど（留）まるは、同じ無常なれどもことはりにや。をひたるはわ（母）はとどまりて、わか（若）き子のさきにたつなさけなき事なれば、神も仏もうらめしや。いかなれば、をやに子をかへさせ給ひてさきにはたてさせ給はず、とどめをかせ給ひて、なげかさせ給ふらんと心うし」。

もし、わが子の姿形をもう一度見れるならば、「火にも入り、頭をもわりて」も惜しくはないと思っておられるであろう、という気持を思いやると涙をおさえることができない、と自身も涙にかきくれながら、母の悲嘆に共苦した。

光日尼はまた、この手紙に「人をころしたりし者なれば、いかやるところに生れて候らん、をほせをかはり候はん」と教示を仰いでいた。日蓮聖人は、いかなる悪逆でも懺悔すれば罪は消えると述べ、仏による悪人救済の姿を書き列ねた。亡き子弥四郎がたとえ悪人であっても、釈迦仏の前でわが子を嘆き弔う母の一念によって罪が消えると語った。まして弥四郎は、法華経を信じて「をやをみちびく身」となったとも書いた。母を法華経信仰の道に入れた亡き子の心と、亡き子を思うが故に信仰の道を歩む老母の志は、死者の滅罪を保証すると明示した（光日房御書）。

故弥四郎の犯したのは小罪である。まして法華経を信じた人でもある。「一人として成仏しない者はない」と法華経が示す通りに成仏したことは疑いない、と聖人は母に語りかけた（破良観等御書）。それは釈迦仏・法華経の世界に、親と子が共に包まれていることをさし示すものであった。母と子の信の一念によって救済が約束されるという回向のあり方を吐露したものであった。光日尼は法華経への信仰に励み、一心の月くもりなく、身の垢が消え即身の仏」になったという（光日尼御返事）。日蓮聖人は、この母を光日上人と呼んだ。子を思うあまりに法華経の行者となったからである。母と子が倶に霊山浄土に参らるるがよい、その時の対面はどんなにか悦しいであろう、とも書き送っている（光日上人御返事）。法華経信仰につながれた親と子の永遠なる縁を、このように教示したのである。

㈡　上野殿（南条）後家尼も、わが子を亡くした母であった。一二八〇年（弘安三）九月五日、後家尼の子・七郎五郎がわずか十六歳で死去した。この知らせを受けた日蓮聖

人は、翌日に手紙を送った。まことに亡くなられたとも思えない、との気持をかくそうともせず、七郎五郎の死を悼み母の悲しみに心を合せた。「時にあたりてゆめかまぼろしか、いまだわきまへがたく候。まして母のいかんがなげかれ候らむ」とも綴った。日蓮聖人は、決して人の死を「世の習い」としてのみ片づけることはなかった。悟りすましてはいなかった。母の忍びがたい思いに同悲し、夢ならばさめてほしい、幻ならば消えてほしいと思われているであろう、とも語った。十六カ月、四百余日がすぎてなお、ふと思い出して両眼より涙をこぼし、本当だろうか、まことに死んだのであろうか、という気持を抱き続けた程であった。「つぼめる花の風にしぼみ、満月のにわかに失たるがごとくこそをぼすらめ。まことともおぼへ候はねば、かきつくるそらもをぼへ候はず」。母の慟哭は、日蓮聖人にとっての悲涙であった（上野殿後家尼御前御書）。

聖人はまた、亡き七郎五郎が父の跡をうけついで法華経の題目を唱えてきた姿をもみつめていた。亡き子は、題目を唱えて仏になったのだ。「この法華経を聞く者は一人として成仏しないものはない」。法華経を信じた七郎五郎に、霊山浄土へ参集した諸仏が手をさしのべ、頭をなで抱き喜び、どんなにか愛されているであろう、心は亡き父と一緒に住するにちがいない、とも示した。

聖人は、この世で法華経を信じた人生は、死後も法華経の世界に迎えとられ霊山浄土で再生することを決定する、法華経を命として悔いなき人生を貫き、そこに死処を求める時、仏と一つ所に住する永遠の命があり、生れ返わりというものがある、と教示したのである。子を思う一念、法華経を信ずる一念は、亡き夫・亡き子にあいまみえる道に確実につながっていることを説いた。

「日蓮は所らう（労）のゆへに人々の御文の御返事も申さず候ひつるか、この事はあまりになげかはしく候へば、ふでをとりて候ぞ。これ（日蓮）もよひもさしくもこのよ（世）に候はじ。一定五郎殿にゆきあいぬとをぼへ候。母よりさきにけさん（見参）し候はば、母のなげき申しつたへ候はん」（上野殿母御前御返事）。日蓮聖人がこう書いたのは、一二八一（弘安四）十二月八日である。入滅の前年、六十歳の時であった。七郎五郎の死から一年余の歳月を経てなお、同悲の念を忘れ去ることがなかった。それは、母の悲嘆を亡き子に伝え、ともに法華経の世界のうちに再生を約束していく師としての日蓮聖人が抱く誓願でもあった。

上野後家尼の子には、七郎次郎時光という青年武士もいた。七郎五郎の兄である。文永年間から、時光は亡父（後家尼の夫）の追善供養に励み、聖人への帰依を怠ることがなかった。

時光は、聖人が身延山中に住み始めると、早速、銭・か

わノリ・ショウガ等の品々を供養した。日蓮聖人は、法華経を読んで亡父に回向すると共に、姿形だけでなく志までも父を継承する時光の行為を称讃し、「あわれ人はよき子はもつべかりけるものかなと、なみだかきあえずこそ候へ」と書き送った（上野殿御返事）。法華経を信じた亡父の足跡をふみ固める時光の姿は、親の心ざしを子が申しのべるものであると語り、父子による身心の継承と孝養の実践をそこに見てとっていた。法華経を信ずる人は、父と母の恩を報ずる。わが心では報ずると思わなくても、この経の力によって報ずる（上野殿御消息）と明示した。法華経における報恩孝養の精神は、その信仰によって譲与される。法華経信仰に励む功徳は、自然に報恩孝養を果していく、と指摘した。まして時光の如く、自発的に法華経を信受し、亡父の功徳を及ぼす営為を、日蓮聖人は「出藍のほまれ」とも表現したのである。

佐渡の阿仏房の子・藤九郎守綱の場合もそうであった。阿仏房が死去すると、一二七九年（弘案二）七月二日守綱は山海はるかに越えて亡父の遺骨を首にかけ、身延の法華経の道場に納骨した。翌年七月一日にも訪れて墓参した。聖人はその行為を「子にすぎたる財なし、子にすぎたる財なし」と称讃した（千日尼御返事）。

下総の信徒・富木常忍もまた、九十歳で死去した母の遺骨を抱いて身延の道場に足を運び、教主釈尊の宝前で仏事を修した。日蓮聖人は、「わが頭は父母の頭、わが足は父母の足、わが十指は父母の十指、わが口は父母の口」と、身心にわたる親子の一体性が現世のみならず後生に至るまで相続され、子の献げる母への志によって、亡き母の滅罪と救済が成就することを示した（忘持経事）。法華経の命脈をうけつぐ親子の肉体的・精神的相承関係の尊さを、日蓮聖人はたえず語り、よびかけたのである。

日蓮聖人は、夫婦の別離に直面した妻に向っても、たとえようもなく悲しくつらいものはない、とその悲嘆を表白した。

ちりしはな　をちしこのみもさきむすぶ
　　などかは人の　返らざるらむ

こぞもうく　ことしもつらき月日かな
　　おもひはいつも　はれぬものゆへ

一二七九年（弘安二）十一月二日、亡夫の命日に僧膳料を供養した持妙尼なる女性宛の手紙に、聖人はこのように詠んだ。夫婦別離の悲哀をうちかえして、この夫こそ娑婆世界の最後の善知識と仰ぎ法華経の題目を唱えるがよい、と回向の心を教えた（持妙尼御前御返事）。

妙一尼という妻は、佐渡や身延の日蓮聖人に下人をさし向けた程の帰依者であった。一二七五年（建治元）五月、

聖人は夫を亡くした彼女に手紙を書いた。妙一尼は、病気の子や女子を抱え、自分も年老いて体も丈夫でない中で夫を失なった。別離のつらさはひとしおのものであったであろう。年老いた尼が一人残って、子供の行末をいかに心配することであろうか、とは妻を想いつつ先立っていった夫の胸中に他ならなかった。その夫が病める妻子にこめた思いは、何よりも病子を救おうとする仏の慈悲につらなるものであった。亡父の心は仏の愛となって、残る妻子に注がれているのだ、と日蓮聖人はいった。

しかも妙一尼の夫は、日蓮聖人の身の上を案じ「法華経に命をすてた功徳」を人生に刻んだ人であった。それ故に、肉身は失われても法華経の世界に再生し続けている、とも述べた。その功徳によって「大月輪の中か、大日輪の中か、天鏡をもって妻子の身を浮べて、十二時に御らんあるらん」というのである。もはや亡父の命が法華経そのものとなって、妻子を訪ね、見守り続けるとも語り、夫の愛が死によっても消滅しえない姿を、日蓮聖人は信の世界に見たのである（妙一尼御前御消息）。

一二七五年（建治元）五月、さじき女房は亡父のために一つのかたびらを日蓮聖人の許へ供養した。聖人は、たった一つのかたびらでも、法華経の六万九千三百八十四の「一切の文字の仏」にたてまつることになる、と書いた。「この切徳は父母・祖父母・乃至無辺の衆生にもをよ（及）ぼしてん。まして我がいとをしとをもうをとこごは、申すに及ばず」ともさし示した。こうして日蓮聖人は、法華経の行者である夫に今生・後生にわたって従いゆく「法華経の女人」としての妻のありようをさとした（さじき女房御返事）。

法華経の信仰が、夫婦別離の悲嘆を夫婦一体の精神的きずなへ再び結びつけ永続させていく仏の慈悲の結晶である、と日蓮聖人はこまやかに書き綴ったのである。

それは、何よりも夫婦の法華経信仰にもとずく相互扶助と一体的なきずなを重視していたからである。日蓮聖人は、妻は、夫という松にかかる藤の如き存在であり、夫との別離は松にかかる藤がささえを失なったに等しい（妙法比丘尼御返事）とか、妻は今生のみならず後生も夫のあり方による（さじき女房御返事）といった。このように述べる場合、その夫とは妻にとって弓とも松ともなりえる法華経の行者として生きぬく存在であった。法華経を信ずる夫に従う妻となることによって「法華経の女人」となることをすすめたのである。

だが、日蓮聖人は夫に信心をすすめ、夫の行為を励ます妻の姿、つまり弓となって夫という矢をとばす妻のありようをも示している。富木常忍の妻は、病気がちの身でありながら、老いた姑の看病し、老母が天寿をまっとうするや遺骨をおさめに夫を身延に送り出した。「や（矢）のはしる

事は弓のちから、くものゆくことはりう（竜）のちから。をとこ（夫）のしわざはめ（女）のちからなり。いまとき（富木）どのゝこれへ御わたりある事、尼ござんの御力なり」（富木尼御前御書）と、夫を激励し、夫という矢を飛ばした弓としての妻の姿をとらえたのである。佐渡の阿仏房を励して、流人日蓮に供養を献げ、さらに身延に三度も夫をつかわした妻・千日尼については、「男は柱・女は桁（横木）、男は足・女は身体、男は羽・女は身」（千日尼御返事）と夫婦のきずなの一体性を示し、夫という羽をはばたかせて身延を訪れさせた身としての妻の「はかりしれない志」をほめたたえた（千日尼御前御返事）。

「女人となる事は、物にしたがって物をしたがえる身」（兄弟抄）とも述べた日蓮聖人は、男に一方的な従属をしいられ、五障三従の身とされてきた女性の立場を転換させ、その主体的な力量と「法華経の女人」としての殊勝さを高く評価したのである。

それは、日蓮聖人が「女人成仏」を追求したことにもとずいていた。法華経のみ悲母の恩を報ずる「実の報恩経」であり、母の恩を報ずるために法華経の題目を一切の女人に唱えさせる、とは日蓮聖人にとっての「願」であった。日本国の一切の女人を助けようと願う志なのであった。釈尊一代の教えの中で女人成仏が第一であり、法華経提婆達多品の説く竜女の成仏は、一切の女人救済をあかすものであった。母への報恩は、女性救済の普遍性にひろがる。女人成仏の実現なくして母への報恩も成就しえない。ここに女人成仏に励み、「法華経の女人」の生き方を説示した日蓮聖人の基本姿勢があったのである。

一二七四年（文永十一）頃、聖人は富木常忍の妻の病気を気にかけていた。法華経薬王品の「この法華経は閻浮第一病の良薬」の経文を信じて心みに修行し、病いを対治なさるがよい、とも語った。医術をよくする四条金吾頼基に頼み治療に努めるように、ともすすめた。姓名・年齢を書いて送るがよい、大日月天に病気がなおるよう祈願しようとも指示した。これは、「一日の命は三千世界にもすぎるもの」「第一の珍宝」と生命の尊さを重視したからに他ならない（可延定業御書）。そこから、業病を不治のものとしてあきらめることなく「定業すら能々懺悔すれば必ず消滅す」ともいった（同前）「設ひ業病なりとも、法華経の御力たのもし」と教示し、どうして病いが治り、寿命も延びぬことがあろうと考えて「身を持し、心に物をなげかざれ」と述べたのである（富木尼御前御書）。法華経への祈りが治病の良薬となることを、日蓮聖人は確信もって語り続けもした（富城殿女房尼御前御書）。厄年に当って病気がちの身を歎く者には、厄とは関節のふしぶしのようなもの、と述べ法華経の良薬を授ける日蓮に大厄をまかせよ、と息災延命・治病への信心を明示した（日眼女釈迦仏供養

事・太田左衛門尉御返事）。病いとは、天魔がその人の信心が強いか弱いかをためそうと試みるもの（法華証明抄）「仏の御はからい」であり、病いによって道心がおこる（妙心尼前御返事）ものであると聖人はいうのである。

しかし、病いとは肉体的なものだけには限らない。法華経への不信・背信こそ精神の重病であるという。「一切の病の中には五逆罪（父・母・仏弟子を殺す・僧団を破壊すること、仏身から血を出させること）と一闡提（仏教の否定者）と謗法をこそおもき病とは仏はいたませ給へ。今の日本国の人は一人もなく極大重病なり」と指摘した。「大謗法の重病」こそ、「病おもきゆへに、我身にもをぼへず人もしらぬ病」であるとも述べた（妙心尼御前御返事）。

日蓮聖人が謗法の諸宗を指弾したのは、謗法の重病を法華経の良薬によって治そうとしたからであった。蒙古襲来の責苦を謗法の日本に対する「灸治」と把握したのも、亡国を招く謗法が貴い命を失わせる五逆罪を犯すものであったからである。重病を療治するには法華経の良薬を集めて服さしめ、悪逆謗法のものを救助するには要法（法華経の題目）によらねばならない（曾谷入道殿許御書）。日蓮聖人は、法華経の良薬によって、社会の重病と個人の病苦を共に蘇生していくために努めたのであった。

(ホ) 建治から弘安年間にかけて駿河国富士郡下方地域に勃発した滝泉寺院主代行智と同寺から日興の教化をうけて日蓮聖人の信奉者となった日秀・日弁ならびに熱原の百姓間の対立抗争と百姓の殉教事件は、のちに熱原法難といわれ、この弾圧に対して日蓮聖人が「一門」意識を高唱し、異体同心を積極的に指導した姿を示すものであった。これは、滝泉寺を中心とした念仏信仰と法華経信仰の緊張関係からついに行智側による日蓮方檀越の百姓への迫害・苅田狼藉を名目とした百姓二十名の逮捕、鎌倉召喚に発展していった。平頼綱の問註を受け、百姓のうち神四郎・弥五郎・弥次郎の三名が法華経の題目を唱えつつ斬首され、残る十七名が入牢する事態となった。日蓮聖人は、鎌倉の弟子信徒の苦難の中における法華経弘通をめざす決意のほどを「各々師子王の心を取り出して、いかに人をどすともをづる事なかれ」と激励し、「我等現には此大難に値ふとも後生は仏になりなん」との確信を強調した。そして「彼のあつわら（熱原）の愚痴の者どもいゐはげましてをどす事なかれ。彼等には、ただ一えんにをもい切れ、よからんは不思議、わるからんは一定とをもへ。ひだるしとをもわば餓鬼道ををしへよ。さむしといわば八かん地獄ををしへよ。をそろしゃといわばたか（鷹）にあへるきじ（雉）、ねこにあへるねずみを他人とをもう事なかれ」と、受難を忍受して法華経信仰を貫き通す覚悟を勧奨した。（聖人御難事）。日蓮聖人はさらに日興に対しても、殺害刃傷および田畠苅取が行智の同意のもとに行われた点を指摘し、

「悉く証人の起請文を用ふべからず。但現証の殺害刃傷のみ。若し其義に背く者は日蓮の門家に非ず」との指導方針を書き送っている（伯耆殿御返事）。聖人は、熱原の百姓が、幕府権力の弾圧をうけ殉教に及んで「南無妙法蓮華経　南無妙法蓮華経と唱へ奉ると。偏へに只事に非ず」と述べ、日興に向って、法華経の行者に対する試練と受けとめて裁判闘争に努めるよう説きつつ、悪鬼の身に入った平頼綱に、文永八年の名越松葉ヵ谷追捕から竜の口頸の座に至る弾圧の当事者であるばかりか再びこの禍をくり返えした重罪によって「重ねて十羅刹の罪を招き取るか。最後に申し付けん」と提示した（変毒為薬御書）。こうして日蓮聖人は、毒を変じて薬とする受難の中における法華経捨身とその貫徹を門弟に厳しく説きあかしつづけたのである。

(六)　一二七六年（建治二）三月、かつての師道善房が死去した。この知らせはやがて、清澄寺大衆より日蓮聖人の所へ届いた。同年七月二十一日、日蓮聖人は「火にも入り、水にも沈み、はしりたちてもゆひて、御墓をもたゝいて経をも一巻読誦せん」との思いを抱きつつ「報恩抄」を書いた。五十五歳の時である。同書を弟子・日向に託して浄顕房・義城房に送った。日向を読み手とし、浄顕房・義城房の二人が相連れ立って、森の頂にて二、三返、また故道善房の墓前にて一返読み上げるよう指示した（報恩抄送文）。

聖人の生涯は、報恩の大願にはじまり報恩の献身に終るといっても過言ではない。「報恩抄」は、その報恩精神を結晶させた著作であった。

日蓮聖人は、これまで願い、決断し、諫言に励み、法華経にすべてを献げてきた救魂と報恩の実践のすべてを亡き師にはなむけた。

仏教を習う者は、父母・師匠・国恩を忘れてはならず、この大恩を報ずるためには仏教を習いきわめ智者とならねばならない、と決意した心を改めて語り始めた。

一切経の勝劣を習い、遂に法華経が衆盲を導く第一の経王であることを知るに至った習学の遍歴と到達点を述べた。諸経は法華経より劣るにもかかわらず勝れているとか同等と主張する謗法のありようを説示した。

謗法と亡国からの救いをめざし諫暁と迫害を蒙ってきた今までの足跡。それは「ひとへに父母の恩・師匠の恩・三宝の恩・国恩をほう（報）ぜんがために、身をやぶり、命をす（捨）つ」法華経のための受難と捨身であり、報恩の人生であったことを報告した。この功徳によって「父母も故道善房の聖霊も扶かり給ふらん」とも披歴した。

日蓮聖人が最も懸念したのは、亡き師の後生の問題であった。師は、きわめて臆病な人であった。清澄寺を離れたくないと執心してきた念仏者でもあった。地頭等に脅かされて聖人を勘当し、遂にいったんは弟子等に見捨てられた

人でもあった。後に、日蓮聖人の諫言を聞いて法華経を「すこし信ぜられ」たこともあった。だが、それは「いさかひの後のちぎり」「ひる（昼）のともしび（燈）」の如く決定的な信仰ともいえなかった。しかもいかなる事があっても、弟子であった者をふびんに思うはずなのに、日蓮聖人が佐渡に流罪されていた時に一度も訪う事がなかったのは、法華経を信じているとはいいがたいものであった。とはいえ師の死去は「火にも入り、水にも沈み」ゆく程嘆かわしいことであつた。

日蓮聖人は、今や前代に超える正法を弘通してきた確信をはっきりと語った。㈠日本並びに世界一同の法華経本門の教主釈尊を本尊とすべきこと、曼荼羅はこの本尊の世界を現わす。㈡本門の戒壇、㈢日本及び中国・インドはじめ全世界にわたって、有智無智を問わず、すべての人々が他事を捨てて南無妙法蓮華経と唱ふべきこと、である。南無妙法蓮華経と声も惜しまずに、末法に唱え続けてきたのは日蓮唯一人であった。法華経の題目によって衆盲を導いてきたこの功徳を、今亡き師に捧げると日蓮聖人はいう。

「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此の功徳は伝教・天台にも超へ、竜樹・迦葉にもすぐれたり。極楽百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。是れひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず。時のしからしむるのみ」。

この汚辱にまみれた国土において、戦乱さかまく末法の時に、法華経流布の仏語を信じ、その真実性を明かしていく生の貴さを日蓮聖人は心をこめて亡き師に伝えた。さらに「日本国は一同の南無妙法蓮華経なり」と、盲目から開目への救済世界に包まれている確信を回向した。

「日蓮法華経の行者となって、善悪につけて日蓮房、日蓮房とうたはるゝ此の御恩、さながら故師道善房の故にあらずや」（華菓成就御書）とも述べている。日蓮聖人が法華経の行者となりえたのは、師にささえられて智者の道を求めたことによる。その師に、聖人は法華経を弘めた功徳を捧げた。そこに報恩の究極的実践があった。草木は、大地なくして成長できない。日蓮は草木のごとく、師匠は大地に当る。法華経の功徳を開花させた草木は、大地に立った。法華経の花は、仏の種を大地に返えす。地のものを地に返えす時法華経の救いは亡き師に帰していく。「されば花は根にかへり、真味は土にとどまる。此の功徳は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし」と日蓮聖人は報恩の心魂をしるしたのである。

釈迦仏・法華経と日蓮聖人の恩徳にめざめ、その教化・化儀をたすけ、信行学にはげむこと――報恩をその人は真に「読む」ことができるであろう――。